

PART 2 スチュワードシップ活動

スチュワードシップ活動における価値創造プロセス

当社は、「三位一体のエンゲージメント」「知財・無形資産への取り組み」「リンゲージメント®」「議決権行使」「ESGインテグレーション」を強みとして、投資先企業の企業価値向上への取り組みを促進します。

コアマテリアリティ

- 温室効果ガス排出
- 気候変動リスク・機会
- 生物多様性
- サーキュラーエコノミー
- 人的資本経営
- DE & I
- ビジネスと人権
- 資本効率改善
- ガバナンス体制

INPUT

- エンゲージメント**
 - 企業調査チーム： 14名
 - エンゲージメント・チーム： 6名
 - スチュワードシップ・チーム： 9名
- ESGスコア**
 - インハウスESGスコア
 - ドラッカー研究所スコア
- 議決権行使**
 - スチュワードシップ監督委員会
 - スチュワードシップ委員会
 - 議決権行使方針の改定
- 外部機関**
 - ドラッカー研究所
 - グラス・ルイス社
 - MSCI社
 - サステナリティクス社
 - S&P社
 - イニシアティブへの参画 など



OUTPUT

エンゲージメント P.55~

- エンゲージメント件数： 1,384件
- エンゲージメント・テーマ別割合

環境・社会・ガバナンス(ESG)	22.6%	ROE・資本コスト	22.3%
投資家との対話の方針・情報開示	26.1%	資本政策 (キャッシュ活用・株主還元など)	29.0%

※ 1回のミーティングで複数の観点から対話をする場合があるため、重複計上しています。

議決権行使 P.73~

- 年間議決権行使件数： 2,370件
- 賛成・反対比率

会社提案に関する議案 (総数： 22,845議案)	株主提案に関する議案 (総数： 371議案)
賛成： 20,327	賛成： 79
反対： 2,518	反対： 292

- スチュワードシップ委員会開催回数： 45回
- スチュワードシップ委員会議案数： 95議案
- スチュワードシップ監督委員会開催回数： 2回
- 議決権行使方針の改定： 2回

PRI年次評価 P.92

Signatory of: Principles for Responsible Investment

項目	評価
投資、スチュワードシップ・ポリシー	★★★★★
上場株式会社におけるアクティブ運用	★★★★★
上場株式会社におけるパッシブ運用	★★★★★
国債・社債	★★★★★
証券化商品	★★★★
外部委託におけるアクティブ運用	★★★★★

- 活動方針 ▶ ベストプラクティス P.70
- 議決権行使方針 P.73
- スチュワードシップ活動方針 P.88
- ESG投資方針 P.79
- マテリアリティ P.31

Focus **かんぽ生命との協業**

～運用面における目的と期待する効果～

2024年5月に公表した「かんぽ生命と大和証券グループの資産運用分野における資本業務提携」を受け、2024年10月、かんぽ生命から大和アセットマネジメントに阿部運用副本部長が着任しました。今回は、金森運用本部長兼CIOと阿部運用副本部長に「運用面における協業の目的と期待する効果」について語っていただきます。



金森 比左志
代表取締役副社長
運用本部長 兼 CIO

阿部 啓一
取締役 兼 常務執行役員
運用副本部長 兼 運用本部 運用企画担当

運用面における協業の意義はビジネスの拡張と相乗効果の獲得

金森: 両社の資本業務提携から数カ月が経過しましたが、運用面における今回の提携の意義を当社の視点から改めて考えてみました。まず、協業の効果として最も期待できることは、当社のビジネスモデルの変革です。具体的には、これまでの当社のビジネスは、伝統的資産中心かつ公募投信中心でしたが、今回の協業によるアセットオーナーとしての知見の獲得等により機関投資家向けビジネスの拡大が見込まれます。また、オルタナティブ投資のノウハウ吸収などによるビジネス領域の拡張にも期待しています。

阿部: 新NISAのスタートや資産運用立国への貢献が求められる事業環境のもと、かんぽ生命としても収益の多

様化や運用の高度化が図れる今回の協業の意義は大きいと考えています。また、当社に来て感じたことですが、両社の企業カルチャーには共通点が多いことが分かりました。両社とも資産運用会社ということで非常に近い価値観を有しており、この結果、スピード感を持って協業を進めることが可能となり、早い段階から相乗効果を得られるであろうと感じています。

金森: 両社の運用における「強み」「弱み」が異なることから、相互に補完しあえることも、今回の協業の意義としては大きいと思います。言い換えると、今回の協業は双方にとってのベストパートナーの組み合わせであると評価できるでしょう。

スチュワードシップ活動のさらなる強化を目指す

金森: グローバルでの評価が低いことなどを背景に、東証が「株価や資本コストを意識した経営」を要請するなど、日本企業は変革を求められています。資産運用会社も、投資先企業の企業価値の向上や資本市場の成長に貢献するため、エンゲージメントや議決権行使を通じたスチュワードシップ活動の強化が求められます。

阿部: スチュワードシップ活動強化の観点においても、今回の協業の意義は大きいと思います。両社の顧客資産を合算すると国内有数の資産運用会社となります。投資先企業に対して変化・改善の働きかけを行うなどのスチュワードシップ活動に両社が協働して取り組むことも、選択肢になり得るでしょう。

金森: 今回の提携によりアセットマネージャーの視点にアセットオーナーの視点が加わることで、スチュワードシップ活動のさらなる強化が見込まれます。これにより大きな効果、すなわち、運用パフォーマンス向上や社会的リターンへのさらなる貢献が期待できます。



阿部: かんぽ生命が強みを有するオルタナティブ投資やインパクト投資においても、スチュワードシップ活動は重要です。特に、インパクト投資については、投資リターンだけでなく、社会的インパクトを示すことも重要視されるため、投資先企業に対するエンゲージメント力のさらなる強化が必要となります。両社の協業の成功が、他のアセットオーナーの当該ビジネスへの参画を促すことにも期待します。

世界で戦える運用会社に向けて



金森: 国内株式運用や海外債券運用など、伝統的資産の運用についてはすでに協業を進めており、今後はオルタナティブ投資やインパクト投資の領域で協業の深化に取り組む方針です。その中でも、インパクト投資について

は、かんぽ生命が国内のトップランナーの地位にあると評価しており、当該ビジネスにおける今後の事業展開、協業の成果には期待していただきたいと思います。

阿部: わたしたち資産運用会社は、運用力を高めて世界で戦える実力をたくわえることが重要です。そのため、運用会社の最大の財産であり差別化要素でもある「人材」の育成は最重要課題と位置づけられます。すでに両社間での資産運用人材の相互交流を始めており、知見・ノウハウの共有等に取り組んでいます。機関投資家ビジネスの拡大、ビジネス領域の拡張、海外における協業の強化、顧客の期待に応える運用商品の組成等に加え、人材育成の成果としての運用力の向上により、世界で戦える運用会社としての土台が整いつつあると感じています。